

企業と学会

石原 孝一郎*



本学会も創立1周年を迎え、順調な発展を続けているのは喜ばしい限りである。この機会に、企業から学会に加入している一員として、学会の活動に関する期待を述べてみたい。

学会が、自由な交流による、学問の発展を目的とするものであることは言うまでもない。特に本学会が、目的とするような科学技術の発展は、次のようなサイクルを通して達成されると考えられる。

理論(アイディア) → 実現技術 → 使用経験 → 理論

一般的にいて、このサイクルの前半は、大学や研究機関が、後半は、企業がなうことが多い。両者の交流と協力が、大切なことは言うまでもない。

ところで本学会の大きな特徴は、技術の若さと、分野の広さの2点であろう。この2つの特徴は、今後の大きな発展のための要素であると同時に、一歩間違えば混乱の原因ともなりかねない。

「若さ」について考えてみよう。人工知能という言葉が生まれてから、やっと30年を経たばかりであり、AIの名を冠した学科が、日本には存在せず、外国においてもごく少数しかない。したがって、基盤が、十分固まったという段階に達していない一方で、この新技術に対する社会の期待は、高まるばかりである。このギャップを埋め、AIが正しく発展するためには、前述のサイクルを加速し、全体のレベルアップを促進することが大切である。特に第3のフェーズである、使用経験をなうユーザ層の方々の、開発のサイクルへの関与を欠くことができない。これは他の学会では、あまりみられないAI分野の大きな特徴といえる。この層の会員は、基礎理論もさることながら、自分たちに役立つ技術、自分たちが使える技術は何かという点に、より大きな関心をいだいでおられると考えられる。このような要求にも学会としてこたえていかねばならない。

次に「分野の広さ」について考えてみよう。今までは、開発のサイクル、流れの方向について述べてきたが、それぞれのフェーズにおいても、いわば、横方向の拡がりも、きわめて大きいことが、またAIの別の特徴でもある。流行の言葉をかりれば、「学際的」といえよう。理論面でも、計算機科学のみならず、認知学、心理学、言語学など、幅広い専門分野の頭脳の結集が望まれる。応用面にいたっては、理工学分野のみならず、医学、農学、社会科学など、あらゆる人間活動の分野への適用が想定される。このように専門分野を異にする人々が集まって、議論する場合に大切なことは、共通の認識・基盤を確認しておくことである。しかし、残念ながら前述した「若さ」のために、用語1つをとっていても、確立された用語や定義が存在しないのが実状である。このためにも、学会の果たすべき役割は大きい。

以上、学会への期待をやや抽象的に述べてきたが、少し具体的に考えてみよう。学会における会員の交流の主要な場は、学会誌と大会と研究会であろう。学会誌については、すでに会員諸兄弟が見ておられるとおり、格調高い会誌が、毎号届けられている。しかし、理論と実際のバランスをとり、幅広い関心にこたえていくためには、もっと多くの会員からの論文投稿が望まれる。大会についても、第1回を成功裏に開催することができた。応募論文数も予想を上まわって、会場を急に増やしたほどであり、内容的にも広い分野をカバーし、かつ時間も多くとって討議を探めることができたと思う。研究会も本年中には発足するであろう。

以上のごとく、本学会は、広い分野を深くカバーしていく期待が寄せられており、その役割と責務は大きい。一方で、組織としての体制もまだ不十分で、会員へのサービスもゆき届かない点多々ある。しかし、開かれた学会として議論を活発にし、若さのエネルギーで困難を乗り越えていく必要がある。このためにも、学会の諸活動面において、会員諸兄弟の積極的な参加と支持をお願いするしだいである。

* (株)日立製作所システム開発研究所第5部部长